カトリック札幌教区ニュース
Catholic Sapporo Diocese News

No.55
2026年11月

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部　〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10 Tel.011-241-2785 https://www.csd.or.jp

2027 World Youth Day ソウル大会

－ WYDのテーマ －
勇気を出しなさい。
わたしはすでに世に勝っている
（ヨハネ16・33）

Ｗｏｒｌｄ　Ｙｏｕｔｈ　Ｄａｙ（＝ＷＹＤ）とは、「教会の今」を生きる若者たちと共にある、カトリック教会の祝祭です。１９８４年に当時の教皇ヨハネ・パウロ２世が世界の青年たちに呼びかけたことによって始まりました。１９８４－８５年、キリストの十字架の死と復活を記念する「あがないの特別聖年」が１年を通して行われていた期間中に、「若者たちの聖年」として、世界中から青年たちがローマに集いました。この集いを第１回目のＷＹＤとし、その後２～４年ごとに世界の各地を会場としてＷＹＤは続けられてきました。

前教皇フランシスコは、２０２３年ＷＹＤリスボン大会のミサの終わりに、次回のＷＹＤが２０２７年韓国ソウルにおいて行われることを発表し、その大会テーマに『勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている』（ヨハネ１６・３３）を選びました。


写真は2023年WYDリスボン大会の様子

「最後の晩さんの席で弟子たちに語ったイエスのことばです。数々の難題を抱える世界にあって、このテーマは、キリストは恐れと罪と死に打ち勝った－その揺るがぬ真実を思い出させてくれます。復活への信仰に根ざして希望しなさい、勇気を出しなさい、と招いています。楽観的に待つのとは違います。キリストは生きて、存在しておられる－。その事実をよりどころとした、大胆不敵の信頼を願ってのテーマです。

この時代、世界中で、若者たちは紛争、経済的苦境、先行きの不透明さなど、さまざまな難題に直面しています。それでも若者たちは、恵みを受けての２０２７年ＷＹＤソウル大会で、『地の塩、世の光』となる喜びが得られるでしょう。

若者どうしの出会いによって、無条件の愛に触れ、『希望の巡礼者』『勇敢な宣教者』として、再び世界へ派遣されるための力を得るはずです。

さあ、希望をもって、喜びのうちに、へこたれずに、あなたの出会ったキリストをあかしする者となって、勇気を出して、ソウルに向けての旅路を歩んでいきましょう！」



このＷＹＤへの呼びかけは、教皇レオ１４世に引き継がれ、いよいよ２０２７年に東アジアでは初となる『ＷＹＤソウル大会』が開催されます。

これまでのＷＹＤでは、日本の公式巡礼団としてツアーが組まれていましたが、今回はお隣の韓国・ソウルで開催されることもあり、地理的にも近く、日本全国から大勢の参加者が見込まれます。そのため、日本の１５教区がそれぞれにツアーを組み、ソウルでの本大会と、その前に行われる韓国各教区ごとの教区大会に参加することになりました。そして、最終日には全世界から１００万人規模で集まった青年たちと、教皇司式のミサに与る予定です。

私たち札幌教区では、馬山（マサン）教区の司教からの招待に応え、ツアーを企画しております。

函館地区に派遣されているアンセルモ李神父（馬山教区所属）のサポートをいただき、また日本の他教区とも情報共有をはかり、現時点でのスケジュール（予定）をお知らせいたします。

往復とも釜山空港での発着を予定しており、全行程として７月２９日～８月９日（全１２日間）を予定しています。

参加費用は、１人１５万円程度を見込んでいますが、航空サーチャージ、韓国国内移動手段によって変動します。

正式な募集開始となりましたら、改めて各教会へご案内いたしますので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

１人でも多くの青年たちに呼びかけてくださいますよう、何卒よろしくお願いいたします。

【２０２７年WYDソウル大会公式日程】
●教区大会（馬山教区）
２０２７年7月２９日（木）～８月2日（月）
●本大会（ソウル教区）
２０２７年8月３日（火）～８月８日（日）

（青少年委員会担当・千葉　充）

２０２６年度 東京教会管区会議

毎年行われている「東京教会管区会議」とは、札幌・仙台・新潟・さいたま・東京・横浜教区の６つの教区からなり、その管区を収める大司教の下（東京教会管区は菊地功大司教、その他大阪高松教会管区、長崎教会管区がある）、各司教・事務局長に加え、必要に応じて副事務局長や司祭団代表が出席して行われる会議です。１つの教区で対応するのが難しい課題や、それぞれの教区で抱える悩み、共同で行うと良いと考えられることなどを、分かち合い聞き合います。

７月７日から８日にかけて行われた今年の会議では、札幌教区から勝谷太治司教、松村繁彦事務局長、千葉充副事務局長が参加し「お墓問題」「シノドス」「財政問題」「組織改編に伴う対応」「ワールドユースデー」のそれぞれの教区対応や進捗状況に加え、外国籍信徒への司牧、高齢化により弱体化した小教区への対応などの意見交換を行いました。それぞれの司教や事務局長の立場から、知恵と知識が共有され、悩みや日本全体のカトリック教会の課題なども分かち合われました。今年はそのことに加え、先に通達された「ピオ十世会への対応」についても菊地大司教より説明を受け、認識を深めました。

教区持ち回りで行われるこの会議は、今年は横浜教区が担当し、箱根湯本の富士屋ホテルで行われました。温泉や食事会で安らぎの楽しい時間と思われがちですが、その時間も、常に参加者同士が教区司牧や運営についての意見交換が行われており、重責を担っている司牧者の姿が見受けられました。

（教区事務局長・松村繁彦）



２０２６年度 全国典礼担当者会議

９月７日から９日にかけて全国典礼担当者会議が行われた。開催地は「御聖体の宣教クララ修道会軽井沢修道院」であった。

例年と異なり、関東地方はすでに涼しさの漂う気候であったが、会場のある軽井沢は、標高１０００ｍ程度の台地に位置しているため、最高気温が平年より２℃以上低い21℃程度とさらに涼しさを増していた。説明する委員の方々と各教区から合せて34名の参加者であった。

中心となるテーマとして「聖週間の典礼における典礼奉仕」についての報告があった。昨年の会議で参加者からの指摘や質問を受けて、『ミサ典礼書』の中の「聖週間の典礼」の改訂作業が引き続き行われているが、今年は特に聖週間の典礼の中の典礼奉仕に絞っての解説であった。主に司祭、助祭、信徒の奉仕者の動きについて言及された。

「聖週間の典礼」は通常の典礼と異なる動作が加わる上に、年に1回しか行わないため、よく理解して執り行うことが必要である。特に木曜日の典礼では終わりの宣言はなく、金曜日の典礼につながっており、また金曜日の典礼も通常の派遣の祝福がなく、土曜日にはミサをささげず、復活徹夜祭の始まりへとつながっているように、「聖なる過越の三日間」は連続した典礼であることを心に留めておかなければならないことが確認された。

また初日には『カトリック聖歌集』（光明社刊）の再編集のためのアンケート結果が各教区から報告された。この結果を受けて、日本カトリック典礼委員会でとりまとめ、編集方針を定めていくことになる。

最終日には信徒による典礼奉仕の手引きの途中経過が報告された。「解説者」「音楽奉仕者」「通夜・葬儀の奉仕者」についての手引きの説明であった。現在は主任司祭の指導のもと、それぞれ信徒が執り行っていると思うが、この手引きをよく理解し、より良い行動ができるようになることを待ち望む。

次回、２０２７年度全国典礼担当者会議は９月７日（火）から９日（木）まで、「典礼音楽」について、広島市にあるエリザベト音楽大学で開催される予定である。

（教区典礼委員会・佐藤謙一）

ミャンマー人共同体

5月中旬、突然、ミャンマー人ヴィンセント神父から連絡が入った。ミャンマー語の黙想会とミサをお願いしている神父なので、夏の黙想会の連絡だと思ったが、それは思いもしていなかった札幌に住むミャンマー青年の葬儀の相談だった。

亡くなった青年はカトリック信者だったので、すぐにミャンマー共同体のメンバーに連絡が入り、そこからヴィンセント神父へ伝わった。突然の死だったこともあり、すぐに葬儀ができないということがわかり、時間を調整して、ヴィンセント神父が札幌に来てくれることになった。

しかし、会社が既に葬儀会場を予約していたため、教会では葬儀ができないことがわかった。せめて彼の母語によるカトリックのミサで彼を送り出したいというみんなの意向を叶えるために、予約した葬儀会社を千葉神父が知っているというので、千葉神父から葬儀会社に連絡をしていただき、一般斎場でカトリック式の葬儀ミサが行えるようにしていただいた。



母国の家族のために、スマホで葬儀の様子を配信しながら、喪主は彼との結婚を考えていた女性が最後の挨拶を日本語も交えて行い、がんばってくれた。火葬場へ向かうバスの中もずっと祈りの言葉が続いた。

そして、夏…改めて彼らが黙想会とミャンマー語ミサのためカトリックセンターに集まった。前日にはヴィンセント神父と一緒に積丹半島へ出かけ、自然を満喫し、美味しいものを食べて、笑顔いっぱいの時間を過ごした。

今回の黙想会の中で、お世話になっている北一条教会の神父方にもお礼がしたいと事前に連絡を受けたため、千葉神父、多文化共生委員会のSr.田口に参加いただいた。

ヴィンセント神父、千葉神父、Sr.田口、私が彼らの前に座ると「親の日」のお祝いとして、素敵な歌声とお菓子のプレゼントがあった。彼らの歌声に、春の出来事を思い出し、思わず涙があふれた。歌声で泣いたのはいつ以来だろう?改めて共同体として、繋がることの大切さを感じている。かわいい子どもたちに心から感謝!

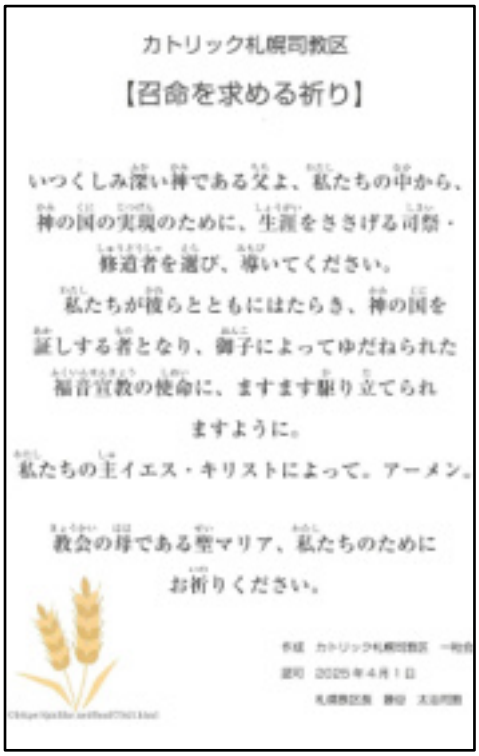
（札幌教区難民移住移動者担当・西　千津）



12月3日は「札幌司教区一粒会の日」

「一粒会」の会員は、私たち札幌教区信徒、求道者、この地で働くすべての司祭、修道者です。この日、私たちは一粒会会員として心を合わせて、日本宣教の保護者である聖フランシスコ・ザビエルの取り次ぎも願い、司祭、修道者の召命を祈り求めましょう！

（札幌司教区一粒会委員長・荒木関　充）


カトリック札幌司教区

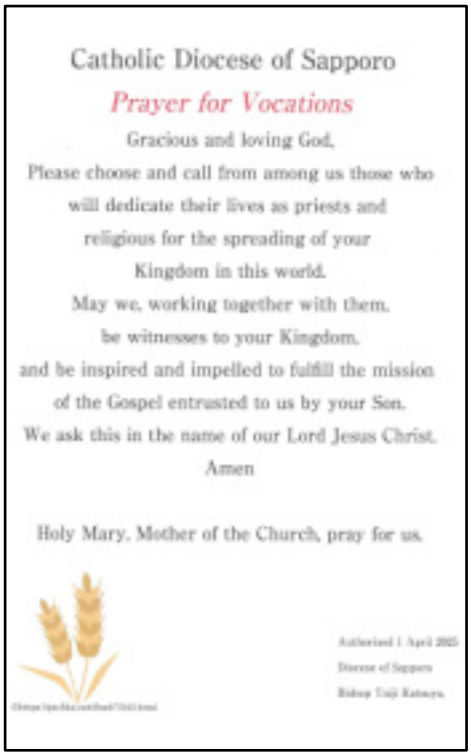
【召命を求める祈り】

いつくしみ深い神である父よ、私たちの中から、神の国の実現のために、生涯をささげる司祭・修道者を選び、導いてください。

私たちが彼らとともにはたらき、神の国を証しする者となり、御子によってゆだねられた福音宣教の使命に、ますます奮い立てられますように。

私たちの主イエス・キリストによって。アーメン。

教会の母である聖マリア、私たちのためにお祈りください。


Catholic Diocese of Sapporo

Prayer for Vocations

Gracious and loving God,
Please choose and call from among us those who will dedicate their lives as priests and religious for the spreading of your Kingdom in this world.
May we, working together with them, be witnesses to your Kingdom, and be inspired and impelled to fulfill the mission of the Gospel entrusted to us by your Son.
We ask this in the name of our Lord Jesus Christ.
Amen

Holy Mary, Mother of the Church, pray for us.

各地区カトリック大会

■釧路地区

『私たちの釧路地区・小教区の未来にむけて』をテーマに開催

釧路地区のカトリック信徒が集う「釧路地区カトリック大会」が8月30日、釧路教会で開かれました（帯広・池田・中標津・釧路）。当日は85名が参集し、川上神父、加藤神父、プポ神父の3名による合同ミサが厳かに執り行われました。

午後からはまず、全体会として西野氏（旧柏林台）、徳岡氏（帯広）が統合に至る経緯（物語）や、それに至る主体的な取り組みについて語られました。

その後、6つのグループに別れて分かち合いが行われ、参加者からさまざまな意見が寄せられました。

長期間にわたる協議や歩みに対して、「理解や感動を覚えた」「聖霊の導きを感じた」という声が多くあがり、統合に伴う困難さを踏まえつつも前向きに受け止める姿勢が見られました。

一方で、教会が抱える課題として、若い世代や子どもの減少、高齢化に伴う参加の難しさ、教会へ来られない方への支援不足、信者同士の交流不足などが共通して挙げられました。

今後の方向性については、信徒参加型の教会づくりをはじめ、ミサ後の交流機会の充実、名札掲示によるコミュニケーションの促進、オンライン配信等を活用したつながりの維持、そして、祈りを通じた一致の重要性が示されました。

【参加者の声】

●参加者Aさん（第1グループ）

「長い時間と信徒の思いが重なって統合が成立したことを知り、聖霊の導きを感じています。若い人や子どもが少なくなっている現状を心配しており、名札掲示などで信者同士の会話を深められる工夫が必要だと思います。」

●参加者Cさん（第3グループ）

「統合に向けて気持ちが一つになるエネルギーを感じました。長い時間をかけた統合に信徒の思いの熱さを実感しています。若い人や子どもの不在に危機感があり、教会とのつながりを保つためにオンラインでの情報発信を進めてほしいです。」

今回の釧路地区カトリック大会で、今後の教会運営や共同体形成における貴重な分かち合いができたことを報告します。

（釧路地区事務局・市村均）



■北見地区

8月30日（日）第58回北見地区カトリック大会が北見教会で開催されました。

今年度より北見地区は、内藤神父の一人体制となり、各教会では集会祭儀が増え、参加者の減少も心配されましたが、北見教会、紋別教会、遠軽教会、網走教会、美幌教会より昨年同様57名の参加がありました。日本人の信者さん以外でも、ベトナム籍、フィリピン籍、韓国籍、イギリス籍など多くの国の方が参加しました。

10時より、内藤神父の司式により合同ミサが開始されました。第一朗読は、北見教会の吐師良一氏、第二朗読は、網走教会のブイ・タイン・フェン氏（ベトナム籍）、共同祈願は、各教会の代表の方が行いました。多くのベトナムの方が参加されていることから、いつくしみの賛歌、主の祈り、平和の賛歌、あめのきさき1番がベトナム語で歌われました。

ミサ後は、内藤神父を講師として、『なぜ、今、アシジのフランシスコなのか～アシジの聖フランシスコ没後８００年の特別聖年にあたって～』の演題で講話をしていただきました。フランシスコ会に所属し、実際に２０１０年に当地を訪れた内藤神父より、当時の写真を用いてわかりやすく、まとまった話を聞くことができました。次から次と戦争が続き、地球環境の破壊が進む現代にあって、アシジのフランシスコの生き方は、今後の私たちの進む方向性に大いに示唆を与えてくれることがわかりました。

昼食休憩をはさみ、午後からは、各教会からの代表者による報告がありました。少子高齢化が進む各教会にあって、外国籍の方の参加の仕方や日頃の接し方を工夫していること、教会から足が遠のいている方に継続的にお便りを出しているなど具体的方法が報告され、大いに参考になるものでした。

北見地区では、司祭一人体制となり、ミサの回数が減るなどのマイナス面もありますが、各教会の信徒同志、教会同志が交流や絆を深め、これからも前に進んで行きたいと思うカトリック大会でした。

（北見教会・笹原和広）



■函館地区

８月30日、宮前町教会において函館地区使徒職大会が開催されました。10時からのアンセルモ神父の講話『地区の将来』には、地区内の６教会から１３０名、11時15分からの合同ミサには、子ども連れも加わり１９０名の参加がありました。以下、講話の要旨です。

八雲教会が、８月30日をもって電話・ＦＡＸを廃止し、湯川教会が連絡窓口になりました。そのような状況の中、４月の人事で、地区の司牧体制に重要な変更がありました。

アンセルモ李動珍（イ・ドンジン）神父が函館地区長となり、元町・宮前町・湯川・江差・八雲の５教会の主任司祭を務めています。当別教会については、トラピスト修道院の後藤正史神父が主任司祭となりました。従来、元町・宮前町・江差を担当していた祐川郁生神父は函館地区協力となり、引き続き、桶田達也終身助祭は函館地区協力助祭となっています。

つまり、当別を別にすれば、５つの小教区を一人の主任司祭のもとにまとめる体制に移行した、ということです。ただし、これは、アンセルモ神父一人だけで５教会を運営するという意味ではありません。信徒が減って、函館地区が弱体化しているから、近い将来に教会統廃合がある、と単純に評価するのは早計です。

近年、札幌教区は、司祭がいなければ教会活動が止まるのではなく、信徒自身が、司祭なしでも可能な教会活動を工夫するよう求めています。さらに今年から、札幌教区は、シノドスの「実施ステージ」に入っています。勝谷司教は、２０２６年６月からの１年間を実行の年、翌年からを評価の期間と位置づけています。したがって函館地区の再編・協働も、単なる人員不足対策ではなく、この教区全体の共同責任・協働という方向の中で見る必要があります。

現在の函館地区は、信者・教会そのものがなくなる状況にはありません。司祭数が限られる中で、６つの共同体を、誰が、どのような役割分担で支えるのかを考える段階にある、とみるのが最も実態に近いと考えています。

従来の「一つの小教区に一人の主任司祭」という発想から、複数小教区を一つの司牧圏と考え、司祭・助祭・信徒が共同して維持する体制づくりへの具体的な一歩（教会事務の一本化など）を共に踏み出しましょう。

（桶田達也助祭）



神様に従う人生を歩みたいです。



函館５教会主任
函館地区長
李　動珍 神父
（馬山教区所属）

「お言葉どおり、この身に成りますように。」（ルカ福音書１章38節）

この聖書の言葉は、私が助祭になった時に決めた聖句です。神学生の時の出来事が、この聖句に決めた理由の一つです。

私が軍隊から復学し、神学校に適応している頃、教区から一つの提案がありました。それは姉妹教区であるグラーツ教区への留学でした。当時は海外へ行くのが嫌だったので、いろいろな理由をあげて断りました。同期の中に留学したい人もいたので、私が断ればその同期が行くだろうと思いました。しかし、１学年後輩の神学生が対象となり、思ったようにはなりませんでした。私の代わりに留学することになった神学生に、とても申し訳なく思いました。

その時以来、教会の中で提案があったり、何かしなければならない時には、神様が導いてくださることだと考え、受け入れると決意するようになりました。（後になって知りましたが、留学の提案は司教様から直接なされたものではなく、神学生担当の神父様のご意見にすぎなかったそうです。）

司祭になってから、自分にできると思うことは断らず、受け入れるよう努めてきました。その結果の一つが、今、日本に派遣されていることです。司教様が日本へ司祭を派遣したいとおっしゃり、私にその準備をするように言われた時、最初は戸惑いましたが、最終的には受け入れ、準備を始めました。日本に来るための準備をしながら、心配も多かったです。自分の日本語の実力がどの程度なのかも分からず、文化が全く異なる外国で暮らさなければならないという事実に、何を準備すべきか分かりませんでした。

日本に来てもう５年になり、ようやく少し分かってきたことがあります。イエス様が弟子たちを派遣する時、何も持たずに行きなさいと言われた言葉が、私にも当てはまるということです。イエス様が何も持って行ってはいけないと言われたことの中には、私がしていた心配も含まれていました。神様が導いてくださる道において、私が心配することは何もなかったのだと、今は分かりました。神様がすべてを準備してくださったと感じました。出会うことになる数多くの人々、少し知らないことがあったとしてもそれを知っていくためのさまざまな機会、本当にすべてがまるで待っていたかのように私に近づいてきました。人は一寸先も分からないため、恐れを感じ、何かを準備しようと努力します。もちろん、努力することも必要なことです。しかし、時には神の導きに自分を完全に委ねることも必要であると、今では分かりました。人間として私が思っている以上に、神様が備えてくださるものは、より完璧に必要なものであると感じながら生きています。日本での５年間、神様の限りない愛と準備に感謝する時間を過ごしています。神様のこの愛に対して、私ができるのは、さらに教会と信者に奉仕することだけだと考えています。不足していて、時には疲れる私ですが、すべての信者と共に神の愛のうちに生きていきたいです。

4人の同級生司祭 50周年記念ミサの日

7月20日に私たちは今まで聞いたことも、見たこともない「お祝い」にあずかりました。それは、4人の司祭叙階50周年記念ミサです。

ヨアキム川上剛師、フランシスコ関口七郎師、ヴァレンチノ山本孝師、アポロニオ佐藤宝倉師、4人はとてつもない時間の大きさ、広さ、深さをもっていました。4人の若者は聖フランシスコに、修道会にあこがれて、フランシスコ会の神学校に入学し、10年、同級生として共にしながら、司祭への道を歩んできました。

川上師、山本師、佐藤師は札幌で7月18日、関口師は前橋で10月23日に叙階式でした。司祭叙階後、若い司祭は旭川地区の教会で司牧にあたりました。ある時は隣同士の主任司祭であったり、同級生が主任の前任者であったり、同じ街出身で同じ司祭から洗礼を受け同じ思いをもって修道院への旅立ちであったり、4人の修道者への道のり、司祭叙階後（4人×50年＝200年）の足どりを聞きたい！知りたい！ですよね。

そして、今年の7月20日、4人の司祭は自分たちが育てられた旭川地区の五条教会で「お祝い」「感謝ミサ」が司教と大勢の信徒と共に行われました。そこには50年間共に過ごした教会の、共同体の仲間、その子供、孫たちの世代も参加していました。そう願ったことがそうなりました。本当に神に感謝です。

（旭川修道院・長尾俊宏神父）



ルカ今田玄五神父 金祝のミサ

9月5日に室蘭教会において、勝谷司教司式による、今田玄五神父の金祝のための感謝ミサおよび祝賀会が行われました。遠方の歴任された教会からお祝いに駆けつけた信徒も多く、室蘭教会の方々を始め、伊達教会や東室蘭教会の共に喜びの中で各々が時間を過ごしました。

1976年に27歳の若さで司祭叙階となった今田神父は、この50年間多くの教会を歴任し、また現在は、司教代理や地区長を務め重責も担って来られました。毎年トラピストでの黙想会を大切にし、2004年には祈りの時間として1年間のサバティカル（休暇）を取り、トラピスト修道院で司祭職の充電も行われました。いろいろな地区を回られた今田神父は、「働いていない地域はあと釧路地区だけ」とおっしゃりながらも、年齢を考えると…と複雑な思いも口にされました。

しかし今年で78歳。まだまだ司祭職として働くことを望んでおられ、健康に留意されながら歩まれることを教区民として祈りたいと思います。ネットや携帯電話に頼らず、固定電話と手紙で頑固に突き進む姿は、時には〝生の声〟を大切しようとする証し人を感じさせられます。今後も今田玄五神父から多くの事を共に学んでいきたいと感じます。

（教区事務局・松村繁彦）



千軒岳殉教記念ミサ

例年、大千軒岳山中の金山（かなやま）番所跡で捧げてきた千軒岳殉教記念ミサですが、昨年は熊被害の影響のためか登山道が閉鎖され、中止を余儀なくされました。今年は何とか開通をと願っていましたが、想いも空しく、今年も閉鎖されたままとなりました。

いろいろ考えた末、トラピスト大修道院のルルドでミサを捧げては？という意見がありました。これを当別教会主任司祭のバジリオ後藤神父に打診したところ、快く了承してくださいました。

7月の最終日曜である26日、霧雨の中、市内3教会、当別教会、他の地域からいらした方、未信者の方々を含め、約30名の方が第64回千軒岳殉教記念ミサに参列しました。初めてトラピスト大修道院のルルドで捧げたミサは今までにない思い出深いミサとなりました。

来年は、大千軒岳の登山道が開通するかどうかはまだ分かりませんが、最期まで信仰を捨てずに殉教した蝦夷キリシタンのためにも、これからもミサを捧げていきたいと思っています。

（千軒岳殉教記念ミサ実行委員会代表・上野博司）



旭川サマースクール

旭川市内の４教会では、教会に通う子どもが減少する中でも神様やイエス様、教会のことを知ってもらいたい、との思いから教会学校を合同で運営することとし、今年で14年目を迎えました。

現在の在籍者数は22名で未洗者のお子さんが多いのですが、カトリック幼稚園の卒園児や、小学生のころから継続して通っている子が大半です。

教会学校では、開設当初から夏の思い出作りとして「サマースクール」を行っており、高齢化しながらも、子どもたちの笑顔が活力のリーダーたちのもと、今年も大町教会をベースに1泊2日の日程で開催しました。

毎年、普段の教会学校では行けない少し遠くにある施設を訪れており、今年は秩父別町にある遊戯施設で昼食をはさみながら元気いっぱいに体を動かしてきました。

入浴は、信者さんが経営する銭湯です。スーパー銭湯には行ったことがあるけど、小規模の銭湯は初めてだった子もいて、とても良い社会経験になりました。



また、教会に戻ってからは歌やゲーム、教会探検などをして過ごし、感謝のミサで日程を終えました。

サマースクールは、月1回会う「友だち」が「仲間」に変わっていくきっかけになっていると感じています。

ここで出会った「仲間」が、これからも神様とつながっていられることを願っています。

（佐久間力神父）

札幌教区司祭「年の黙想会」

今年も、北斗市にある厳律シトー会・灯台の聖母修道院（トラピスト修道院）を会場に道内の16名の司祭・助祭が集まり、札幌教区司祭「年の黙想会」が９月14日から19日にわたって行われました。

期間中、参加者は修道院のミサに参加するほか、朝3時40分の「朝の祈り」に始まり、９時40分の「寝る前の祈り」に終わる聖務日課に随時参加します。

午前中には、修道会の後藤正史神父から４回にわたる講話をお聞きしました。

そして、昼食後は修道院裏手のルルドや敷地内を散策したり、誘い合って近隣の温泉に出かけたりと、思い思いの時間を過ごします。中には、名物のソフトクリームに舌鼓を打つ方もいらっしゃいました。

今回の講話ですが、昨年、終生誓願され観想修道会の修道士として正式に認められ、祈りと観想（黙想）、労働を中心とした生活を送っておられる後藤神父の、世俗とは数歩離れた立ち位置から話された表題でした。

教皇レオ十四世の初めての回勅「人間の偉大さ」の中心テーマである「ＡＩ」、日韓辞書の編纂に携わられた方らしく「（聖書の）翻訳と原文…裁くな・忍耐と我慢」、９月１日から10月４日までの「すべてのいのちを守るための月間（被造物の季節）」に因んだ「新しい創造に向かう福音宣教」、外国人観光客の多い場所柄か、海外で注目されている日本の「ＫＹ（空気を読む）文化」、７月に千軒岳蝦夷切支丹殉教慰霊ミサの司式をされたこともあってか、「死なない殉教…現代社会における殉教的生き方」と、実に多岐にわたりました。

特に、「ＡＩ」については、人類の存在を脅かす危険性が各方面から指摘され、「ＡＩの時代における人格の擁護」（教皇初勅のサブタイトル）が重要な課題となっていることを学びました。

最終日の勝谷司教司式による御ミサのおいても、司教はご自分がＡＩに幾つかのテーマや条件を指示して作成させた完璧に整えられた説教を（それとは告げずに）披露された後、「私たち司牧者にとって求められるのはこのようなＡＩの完璧さではなく、たとえ不完全であっても、目の前の相手に具体的に直接寄り添う姿勢です。」と語られました。

参加者は、心身共にリフレッシュされて各々の持ち場へ戻っていかれました。

（桶田達也助祭）



2026
札幌・旭川地区
合同墓参の様子


旭川地区


札幌地区


札幌地区


旭川地区


札幌地区


札幌地区


札幌地区

【旭川地区】
８月１５日(土)１５時
旭川神居共同墓地
【札幌地区】
９月２０日(日)１４時
白石共同墓地

カトリック中高生サマーキャンプ

大町教会　梶山　寧音（中１）

私は初めて「中学高校生サマーキャンプ」に参加しました。

普段は旭川市内の合同教会学校に参加していますが、市外の人と交流をすることは少ないので、札幌や函館などから集まった20人ほどのみなさんと出会うことができました。

印象に残ったことは、「自分たちでお祈りを考える」ことです。いつもは「主の祈り」などを通して神様にお祈りをしているけれど、今回は、「自分たちが思ったことをお祈りにする」ということをしました。サマーキャンプでの出会いや感謝をお祈りにしました。この体験はサマーキャンプならではの取組だったので、とても新鮮でした。

また大人数での食事や外出をすることはあまりないので楽しかったです。マリア院での誓願式に参列したり、石狩望来海水浴場や銭湯、花川教会など、行ったことのない場所にも行けてとても楽しかったです。

新しい友達や先輩と過ごした３日間は、とても貴重で良い経験になりました。神様やサマーキャンプの準備をしてくれた方など、たくさんの方々のおかげで楽しい思い出が作れました。ありがとうございます！

また来年も参加したいです！





広報をより良くするために

教区広報委員会委員長　松村繁彦

日頃から各小教区におかれまして、広報に尽力いただいていることと思います。

広報の働きは、多くの方々に小教区の現状をお伝えし、信仰を伝達し、孤独ではなく連帯して共に歩んでいることを確認する道具として存在しています。また新たにキリストと結ばれたいという人と教会を繋げる役割や社会にキリストの愛を伝える（福音宣教）ためにもしばしば役に立ちます。その媒体は現代では紙面・ＳＮＳ・ホームページなどで活用されていることと思いますが、同時に昨今ウェブを通して便利な時代になってきているとともに、広く世界にまで閲覧できる状態になってきており、個人の特定や著作物の乱用などによる問題も出てきています。

今回はそれぞれの媒体を作成するにあたり、気を付ける点、リスクを減らす点等を通して、より良い広報活動ができるようにポイントを紹介したいと思います。

１）世界広報の日教皇メッセージを読みましょう。

小さな教会新聞であっても、カトリック教会の名によって発行・伝達しています。より相応しくなるためには、教皇メッセージを受け止め・全世界のカトリック教会と連帯しているという意識を持つことは大切なことです。２０２６年世界広報の日（１月２４日発表）教皇メッセージ「人間の声と顔を守る」と題して、ＡＩ（人工知能）に触れて呼びかけられています。私達は教皇・司教・司祭と繋がっていることを大切にしましょう。

２）紙面やSNS、ホームページを常に見直す

時代や教会の雰囲気によりその用途や対象が変わります。その役目が官報なのか対話紙なのか、誰に向けているのかなどを振りかえり調整する必要があります。例えば、紙面は教会に来られる方や教会に来られないがつながりを保ちたい方のため、ホームページは初めて教会に来る人のためなど、対象を明確にすることで使い分け、それぞれの特徴を出すことでより良い広報が実現できます。また編集にあたって、行き当たりばったりではなく、事前に計画することで、全体構成とボリューム、内容が偏らないようなバランスなども見えてきます。

３）写真や挿絵・イラスト

①文章を先に作成して、後から写真などを挿入するケースが多いと思いますが、文章を助けるために写真が使われるように、写真の撮り方も撮影者は考える必要があります。写真と文章は一体になることで、よりメッセージ性が強くなります。時には写真を先に載せてから、文章を当てはめることもあります。紙面に思いを載せることで、読者は一体感を感じるのではないでしょうか。また写真の撮り方の工夫、修正加工なども紙面に大きな助けとなります。

②写真、挿絵、イラストにはそれぞれ肖像権、著作権（他、商標権、プライバシー権、名誉権等）などが存在します。自分で作成したものを自分の名の下で使用することはできますが、他者が写真に入り込む・他者が作成した作品を使う場合などは許可が必要になります。フリー素材などは問題ありませんが、小さな挿絵であっても他者が作ったものであれば後に権利使用に関して訴えられると賠償を負うことにもつながります。また、特に子どもを始め個人が特定される写真が世に出回るときには、本人の承諾なしでは掲載に危険性が伴います。必ず本人確認を行うよう努力してください。広報担当者として一番気を使うところです。

４）文章の引用・参考

文章を書くにあたり、引用、参考などをするケースがよくあります。しかし時々まるで自分の言葉のように記載することもあります。引用する文章が長い場合などは必ず出典先を明記する必要があります。ホームページも同様です。そうすることで盗作扱いにはなりません。使う側も使われる側も文章化されることは名誉なことですが、時には意図しない使われ方をする（切り取り）場合もあります。出典先を明らかにすることで、著者の責任を明確にします。

これらを参考に、広報部門の教会奉仕者としての良い広報を行っていただきますよう応援いたします。何かご質問などあれば、教区広報委員会（担当：松村神父・連絡先：教区事務局）までお声がけください。



平和講演会に参加して



例年プロテスタント教会と合同の「8・15札幌平和祈祷集会」が、新教側の要請で初めて北一条教会で開催され、勝谷司教の講演会が行われました。テーマは「非暴力による平和の構築～武器ではなく対話を、憎しみではなく赦しを～」です。

司教は長くカトリック正義と平和協議会の担当司教を務められ、バチカンで数多くの協議に参加し、非暴力による平和構築を国内外で発信してこられました。講演の中で北アイルランド紛争や南スーダンでの非暴力による平和構築の実例が紹介されました。その崇高さに心打たれると同時に我々の信仰が問われている、と考えさせられました。

一方、戦争についてはさまざまな議論があります。自衛戦争は否定されず、ロシアのウクライナ侵攻以来、多くの国々や我が国でも軍事力の強化が計られています。司教が「カトリックは正戦論を否定している」と明言されたのが印象的でした。

カトリックには正戦論の長い歴史があります。見直しはヨハネ23世から始まり、ヨハネ・パウロ2世とフランシスコ教皇の広島訪問により加速されたと思います。両教皇は核兵器を絶対悪とし、核廃絶と戦争防止を全人類に求めました。正戦論の否定はレオ14世も受け継がれ、定着しつつあります。

新たな戦前といわれる昨今、司教は信徒一人一人に「暴力や武器によらない、真の平和構築」の実践を求めています。今、最も大切な講演であり、多くの地区での講演を望みたいと思います。

（小野幌教会・稲川良道）

9・11を忘れない！



9月1日札幌教区カトリックセンターにて、平和と共生を考える札幌集会が開催されました。この集会は、1923年9月1日関東大震災時に起きた虐殺事件を忘れず、二度とこのような悲劇を起こさないために、100周年だった3年前から始めました。

今年は、「いま私たちの隣人は？～外国人労働者の現状と、私たちにできること～」というタイトルで、道内にいる外国人労働者への不等な扱いや差別問題について、それらの人々の救済や企業との交渉に当たってこられた鈴木一氏（日本キリスト教団札幌手稲教会・札幌地域労組）にお話を伺う計画でした。

ところが、集会直前になり、京極町の農家で、ミャンマーからの労働者が暴力を受け、その救済活動を鈴木一氏や西千津氏（カトリック札幌司教区「いのち・平和・人権委員会」難民移住移動者担当）が行う事態になりました。

集会当日、日本キリスト教団札幌手稲教会に一時避難しているミャンマー人の女性4名も参加され、鈴木氏、西氏から、今回の事件の経緯と問題点について詳しいお話を伺うことができました。100名近い参加者があり、今後のため、「特定技能」で入国する外国人労働者の安全保障の法整備や、今回のような緊急避難時に、複数の教会が連携して受け入れ体制をつくる必要性などが議論されました。

（札幌教区エキュメニカル委員会・小野有五）

■■お知らせ■■

白石共同墓地（合葬墓）の納骨期間は原則4月から11月までです。積雪期間（12月から3月）は納骨を行いません。
詳しくは右記教区本部事務局までお問い合わせください。

クリプト札幌

カトリック札幌司教区納骨堂

札幌教区カトリックセンター地下
家族壇568区画・合葬壇730
天候問わずいつでも墓参可能



白石共同墓

札幌市白石区平和通10丁目北5-1
札幌市白石本通墓地

札幌教区の司祭・修道者・信徒ならびにその家族を対象とした合葬墓

お問い合わせ　〒060-0031　札幌市中央区北一条東6丁目10　札幌司教区本部事務局
電話　■白石共同墓：011-241-2785　■クリプト札幌：011-221-4244
いずれも平日9:00～17:00　（土曜日曜祝日及び夏季冬季休業を除く）

教職員研修会

道内のカトリック学校7校計18名の教員が集まり行われた教職員研修会（9月9日～10日）は、カトリック・ミッションスクールとしての在り方や各校のアイデンティティを再確認する有意義な時間となりました。

初日はサレジオ学院中学校・高等学校校長鳥越政晴神父を、2日目は札幌教区千葉充神父を講師としてお迎えし、講演いただきました。その中で共通していたことは、人間は「神の似姿」として創造されており、それを体現するためには他者に対して責任と尊敬、愛を持って交わることが重要であり、カトリック学校が根幹に据えるべき視点であるということでした。

これを踏まえての分かち合いや、各校の取り組みの紹介では、「カトリック・ミッション」に沿った生徒指導や教科指導、行事や諸活動がどのように行われているかを共有しました。日々の小さな活動の積み重ねの中にカトリック学校としての理念を見出すこと、また、さまざまな判断をする際に持つべき「軸」を再確認しました。



この研修を通して、カトリック学校に勤務する教職員の使命や役割を見つめ直し、各校に集う生徒に希望をもたらす働きができるよう、各人が決意を新たにしました。この学びが各校の更なる発展に繋がることを願っています。

（札幌光星中学校・高等学校・近藤　望）

函館地区カトリック園教職員研修会

函館地区ではコロナによって中断されていた北海道カトリック幼保連盟加入園の合同研修会を昨年から再開し、今年は9月5日（土）に宮前町教会を会場に開催しました。

近年の幼児教育改革にともなって、幼児教育施設の多くが日曜祝日以外は子供を預っており、教職員が一同に集まる催しの開催が難しくなっています。今回も、園長・主幹先生が園に残り、預り保育の対応にあたるなどのやり繰りをして、68名の参加をいただくことができました。

幹事としても、各園の努力に報いるため、日本カトリック幼保連盟主催の研修会として公認していただき、国の補助金（処遇改善加算）の要件となるキャリアアップ研修とすることができました。



祐川郁生神父によるギター伴奏の聖歌合唱を交えた、み言葉の祭儀に続き、カトリック信徒で函館短期大学保育学科教授、公認心理師、学校心理士スーパーバイザーの藤井壽夫先生による「愛着障害とは～愛着障害の理解と発達障害との見分け方」と題した講演をいただきました。

参加者は日頃の保育教育活動に照らし、様々な気付きを分かち合うことができたようでした。

（函館カトリック学園・桶田達也）

日本カトリック幼保連盟・北海道カトリック幼保連盟主催 園長教職員研修大会

7月25日（土）藤女子大学（札幌市）にて、全道のカトリック園（幼稚園・認定こども園・保育園）の園長や教職員を対象とした第59回園長教職員研修大会が行われ、対面とオンラインのハイブリッド形式にて道内56園、約400名が参加しました。

第Ⅰ講話では伊藤幸史神父（新潟教区）をお招きし、子どもたちに食卓を通じて「あなたが大切」と伝えていく大切さを教えていただきました。

第Ⅱ講話では板東光子氏（新潟県社福法人平和の園理事長）より「子どもにチャンスを与える保育」についてお話をいただきました。



いずれも「食」という身近なテーマに沿いながらも別の視点から聴くことができ、保育者として、そして人としても、学びの多い内容となりました。

続いて事例報告では旭川・苫小牧地区より「災害対策」について、実際に避難を体験した園の取り組みなどが発表され、自園の備えを見直すきっかけとなりました。

最後にチャペルにて、心ひとつに静かに祈りの集いを行い、閉会となりました。全道の先生方が共に集える喜び、また、オンライン参加でも画面越しに同時に祈り、同じ学びを分かち合うことで、カトリック園がひとつになれた貴重な時間となりました。

（北海道カトリック学園・杉野直子）

ともに生きる
カトリック 難民移住者支援 ネットワーク

前号の教区ニュースで、中央協議会の組織改編に伴い、札幌教区において私が長く活動していた「難民移住移動者委員会」が「いのち・平和・人権委員会」に統一された旨、報告された。中央協議会も札幌教区もまだまだ新しい体制に戸惑いながら対応しているというのが、正直なところであり、私自身も自分の立ち位置をわかっていない。

とはいえ、「難民移住移動者委員会」の元で行っていた取り組みは、組織改編に関係なく、動いている。特に支援の現場は目の前にいる人に対して、「落ち着くまで待ってください」とは言えない状況である。

組織改編の動きが始まった時から、その点を危惧した「難民移住移動者委員会」に繋がる各教区のメンバーは、何度も何度も話を重ね、どのようにしたらいいのかを検討してきた。そして、その結果として私たちは、「一般社団法人カトリック難民移住者支援ネットワーク」を立ち上げ、日本カトリック司教協議会公認団体となった。

「カトリックのネットワークを力に、ともに生きる社会へ」「つながることで、いのちを支える」このようなキーワードをベースに「いのち・平和・人権委員会」と連携・協力しながら、活動する。既に行っているものには、コロナ禍から始まったベトナム語ホットラインがある。ベトナム人司祭やシスターの通訳を中心に始めた活動は、30回を超えており、組織改編に関係なく、続けている。

8月16日の「聖書と典礼」P7に記載されていた「日本カトリックいのち・平和・人権委員会」の委員長である森山信三司教の言葉に大きな指針が示されていた。

『私たちの教会は少子高齢化が加速し、教会の中の「働き手」は限られています。それゆえ、教会外でいのち・平和・人権の擁護のために働いている多くの方々、市民団体、あるいは外国籍の方々と手を携えてともに歩んでいく必要があります。今後の私たちの教会の歩むべき一つの道の方向性がここにあると思います。』

（札幌教区難民移住移動者担当・西　千津）

訃報

◆マリアの宣教者 フランシスコ修道会



Sr.M.テレジア
太田綾子

7月29日創成東病院にて神様のみもとに召されました。96歳。

【略歴】
1930年7月13日生まれ
1958年12月14日入会
1964年12月15日終生誓願



Sr.テレジア
福永順子

8月29日創成東病院にて神様のみもとに召されました。90歳。

【略歴】
1936年4月9日生まれ
1959年9月15日入会
1969年3月19日終生誓願

◆聖ベネディクト女子修道院



Sr.ベルナルディン
櫻井利子

6月23日グループホーム「和」にて神様のみもとに召されました。100歳。

【略歴】
1926年5月13日生まれ
1950年4月8日受洗
1960年6月7日入会
1967年2月10日終生誓願
2023年2月10日ダイヤモンド祝

カトリック札幌司教区
ハラスメント対応デスク

080-2879-3168

火曜～金曜　10:00～14:00
祝日及び夏季冬季休業日除く

✉ sapporo.harassmentdesk
@gmail.com

編集あとかたり 後語

今年は地震災害のみならず、各所で豪雨災害が頻発しています。特に千葉県での度重なる豪雨被害は、復興しようとする心までへし折るような、まさに「泣きっ面に蜂」の出来事です。片や、雨が降らずに、渇水で困っている地域もあり、本当に、気候の変動とそれに伴う異常気象は、わたしたちの予想をはるかに超えて現実を突きつけます。

教皇フランシスコの「すべての命を守る月間」を過ぎたとしても、わたしたちは地球の異常気象の原因ともなっている、わたしたちの社会活動を、一人一人の生活スタイルの根本から見直す必要があると感じます。

しかし、そんな中でも、仕事上、車に乗らなければならず、かつ、長距離も走り、石油燃料を消費し続けている自分をもどかしく思います。福音を延べ伝えるためなら、CO2を他の人より多く排出するのも仕方がないとするか、CO2排出を減らすために、自分の活動を制限すべきか、悩みの種にはなりえませんが、それでもやはりもどかしさは残ります。わたしたちにできることは、どんな時でも「誠実に悩み続ける」ことくらいでしょうか。

（佐久間力）